シコまで出向いて下さった。メキシコ・シティーで感激の対面をするはずであった。しかし，なんたること，クリスマス時期で，大学の講義はなく，ちょうど下宿を引っ越したこととぶつかり，手紙を受け取ったときは，時すでに遅しであった。この場を借りて，改めてお詫びします。

4年前，切腹手術に直面したとき，「君は男の厄年で考え方がいいかもしれないね」と言われ大いに納得してしまったこと，父の最後を送るのに右往左往したこの2年，「親はどういう形であれいつまでもいてくれた方がいいと思うようになりますよ」等など忘れられない言葉である。戦闘真っ最中の時には，深く私の心に到達しなかったが，今にして思えばである。中でも，迷惑をかけどうしであったのにも関わらず，通夜の席で，「よく尽くしたよ」と言って下さったことにどれだけ救われたことか。言葉だけが全てでないことは確かである。言葉は凶器にもなることもある。しかし，人を思う心の優しさがあるとき，言葉は人の苦しみを和らげる。式先生の言葉が心に残るのは，そんな言葉であるからだろう。

物事に「甘い」ことが横行するこの時代に，「厳しさ」をどのように振り向けて行くのかが，式先生から課された私のこれからの課題の一つであろうと思う。純度100％の砂糖に近い私にとっては，重たい課題ではある。

（16回生）

先生のこと

新　井　桂　子

地理学教室に助手として勤務して，早5年の歳月が過ぎようとしている。4月から翌年の3月までを1つの周期として，事務的な事柄は毎年繰り返されるが，人間に関することはいつも突然に起こる。昭和58年に学部を卒業し就職した私が，大学院へ進学したいと申し出たことも，突然の出来事の“端くれ”くらいには加えられることだろうか。どうにか無事合格させていただき，何を研究するかは，「平地林について」くらいしか言えなかったが，指導教官は式先生にお願いしようと決めていた。

先生のご専門は，地形学・地図学から地誌学まで広い分野をカバーしておられるが，その基本は，フィールドワークに置かれているように思われる。先生との最初のフィールドワークは高尾山であった。

大学院に入学して間もない6月の一日，先生と荻窪駅でお会いして，中央線を西に向かい，高尾駅に着いた。まずむかったところは，浅川の林業試験場であった。平地林を研究したいと言いながら，そういうものとは全く無縁に暮らしていたので，まず基本的なところからと，御一緒して下さった。

「お茶の水女子大学教授」の名刺が効いたのか，試験場の場長さん自ら応対して下さり，場内も案内していただいた。その時そこに植えられていたのが「サンブスギ」であった。樹形は整った三角形で，樹齢50～60年程の一群のサンブスギは千葉県下総台地南部の山武町が主産地だという。東京から50㎞余りのところにかなりまとまった平地林が残っているという貴重な情報が得られたのだった。私はこれを修士論文のテーマとすることになる。

その日はそれから高尾山に登ったまではよかったが，下山は徒歩でと歩き始めると，雨は降り出すし，道はなくなってくるし，山歩きの経験のない私はどうなることかと少々不安に思ったものだった。勿論，無事に山を降りることはできたし，後で，この時の話になっても，先生は「あれくらいはたいしたことはありません。」とおっしゃっている。

私の場合は修論であったが，先生は，卒論を指

導することになった学生のフィールドには必ずお出かけになる。そうすることが，学生のためにもなるし，また，ご自分のためにもなると言われており，過去5年間の指導学生のフィールドはすべて巡られたのではないかと思う。先生は，4年前，体を壊され，入院されたことがあったが，その年でさえ，フィールド行きは欠かされなかったと記憶している。フィールドに出ることで，御自分の健康度を測っておられるようでもあり，私が，先生にとってフィールドワークは基本と思う所以である。私は，各地のフィールドへおいでになる先生からいろいろなお話しを伺う機会を持ち，「助手の役得」とその都度楽しみに聞かせていただいた。

過去何十年かにわたるフィールドワークの蓄積が，先生が近年ご講義なさっている「地誌学」の一つの源ではなかろうかと拝察しているが，不勉強にして在学中に履修する機会を逃してしまったことが残念である。

最近のフィールド行では，しばらく止めておられた自動車の運転も「大丈夫だったよ。」とおっしゃるほどお元気でいらっしゃる。これからも，益々お元気でフィールドにお出かけになり，新しいお話を伺えることを希望している。

（31回生）

式先生の退官によせて

葉　倩　瑋

入学してから十年，長々とお茶大にお世話になっている私は，式先生と身近に接する機会も多く，先生のかくれた一面を垣間見ることのできたひとりだと思う。

そんな一面にふれることができるのは，なんといっても巡検である。つねづね，先生はフィールドワークの大切さを説いてこられてきた。実際に自分の足で歩き，その土地を知ることが，地理学を学ぶにあたっての基本であることを，入学したときから教え込まれたものである。事実，先生の巡検に参加する度に，フィールドワークの大切さを実感すると共に，先生の「地域」に対する着眼点の鋭さと豊かさ，そして，聞き取りテクニックの絶妙さに敬服してしまうのである。先生には，その地域の特性を直感的に看破してしまわれる能力がおありのようである。もちろん，それが豊富な知識の上に成り立つことはいうまでもないが，何げなく見過ごしてしまう小さな事象をも視野に把え，「なぜそれがそこにあるのか」という素朴な疑問に端を発して，最後には，その最初の「ひっかかり」こそが，その地域の特性を解き明かす鍵であったことが明らかとなるのである。そして，それまでのその地域に対する漠然とした印象が，肉付けされて一挙に奥行を持ったものとなっていることに気づかされる。自然的要素にしろ，人文的要素にしろ，ささいな特徴からたぐりよせるようにして，その地域を浮き彫りにしていかれる手腕は，それが，あくまで自然体で進められているため，いっそう鮮やかなのである。

そうした地域への切り口の鮮やかさもさることながら，先生の聞き取りテクニックは，先生のお人柄をも物語っているようで，特に印象深い。

巡検では，そこで出会う人にいきなり聞き取りに及ぶことが度々あるが，そんな時の先生の話の切り出し方は実にさりげなく，まるで世間話をするような気さくさのなかで，いつのまにやら事実の核心に迫ってしまっているのである。その間のとり方はなんとも絶妙というほかなく，横でいつもただ感嘆しながら聞かせていただいている。

たしか五日市・秋津方面への巡検であったろうか，ぜいはあと山道を上っていたところ，大きなカゴを背負い，黙然と歩いてくる老人と出会った。すると先生はふとその老人と肩を並べたかと思うと，「やあ，おじさん，何を運んでおられるんですか」と語りかけ，そのまま老人と愉快そうに話を交わしながら，歩を進められたのである。たいそう気難しそうにみえた老人であったので，思わず息をころして様子をうかがったが，老人もまた愉